



2025年11月発行 | VOL.4

THE TOBISHIMA TIMES

編集・制作：島づくりディレクター 服部 帰蝶

連絡先：とびしま総合センター TEL 95-2001



秋風の飛島からこんにちは！『THE TOBISHIMA TIMES』第4弾をお届けします。心地よい風が吹くこの季節。島では行事や防災訓練などを通して、人と人とのつながりを感じる場面がたくさんありました。今号もその一部をお届けします。

続！マーメイドスイム体験イベント

飛島の海が教えてくれる、海との新しい付き合い方

9月上旬、飛島海水浴場で『マーメイドスイム体験イベント』を再び開催しました。今回は、定期船の欠航で8月に来られなかった方や、島でキャンプをしていた大学生たちが参加。天気にも恵まれ、みんなで海の中を楽しみながら“人魚気分”を満喫しました。

前月同様、体験ではまず安全講習を行い、泳ぐ際はライフジャケットを着用。（※一部の参加者は、十分な泳力があると判断したためライフジャケットを外しています。）参加者一人ひとりの様子を見ながら、無理のない範囲で楽しんでももらいました。

最近“海離れ”とも言われ、海に入る機会が減っているそうです。現在、酒田市でも海水浴場は1か所しかなく、中学生以降はプールの授業もないため、水辺に慣れていない子どもが増えていると聞きます。

飛島の海はきれいなだけでなく、岩に囲まれ、波が穏やかで離岸流もなく、まるで自然のプールのように。初心者でも安心して海に入れるのが大きな魅力です。

また、庄内地方では「お盆を過ぎるとクラゲが出て泳げない」とよく言われますが、飛島では数が少ないため、ラッシュガードなどを着用すれば安心して泳ぐことができます。実際、海の中では魚などさまざまな生き物に出会え、初めて海に入る学生たちも「目の前で見る海の中ってこんなに綺麗なんだ！」と驚いていました。

飛島の海で体験できるマーメイドスイムを通して、海をより身近に感じ、安全に楽しむきっかけになるとともに、次世代へと海の魅力や大切さを伝える機会になればと思います。



妖怪たちが大はしゃぎ！？飛島盆踊り

船は来なくても、妖怪は来た！

9月14日、飛島海水浴場にて『第2回 飛島盆踊り』が開催されました。

この盆踊りは、大正大学の学生たちが企画・運営を担っており、「妖怪のコスプレをして盆踊りを楽しむ」という、ちょっとユニークなお祭りです。

今年は定期船の欠航により、学生と島民のみで行う小規模な開催となりました。最初にその話を聞いたときは、「学生たちはがっかりしてしまうのでは…」と少し心配していましたが、その心配は杞憂でした。

開催当日、学生が島内放送を行うことになり、私は放送機材の使用をお願いするため、とびしま総合センターのセンター長に相談し、あわせて学生たちの送迎を行いました。合間にのぞいたコスプレ準備の様子からも、「せっかくだから楽しもう！」という前向きな気持ちが伝わってきました。

いざ始まった飛島盆踊り。関係者の顔合わせを終えると、妖怪姿の学生たちが“百鬼夜行”さながらに海水浴場へと行進していきます。鬼や天狗といった定番の妖怪に加え、“生ビール妖怪”などユーモアあふれるキャラクターも登場し、飛島盆踊りの曲に合わせて思い思いに踊りました。

その様子を見ようと、島民の方々も次々と会場に集まり、手拍子を打ちながら笑顔で楽しむ姿が見られました。かつての飛島盆踊りとは少し形が変わっても、島の人と学生と一緒に盛り上がる光景に、この行事の温かさを感じました。



いざ佐渡島へ！島づくり人材養成大学

観光では見えない、佐渡島のリアルを探して

9月29日から10月3日まで、「島づくり人材養成大学」への参加のため、佐渡島に滞在しました。

これまでの同講座では、離島を訪れても主に室内でのグループワークが中心だったそうですが、今年度からは大きく内容が変わり、フィールドワークを主体とした実践的なプログラムに刷新されたとのこと。今回のフィールドワークでは、班ごとに島内を巡り、島民への聞き取りを通して日常に潜む魅力を再発見し、それらをZINE（小冊子）としてまとめるという内容でした。

私の班は旧平清水・金井エリアを担当し、市役所や図書館などが立地する佐渡島の中心部を訪れました。お話を伺う中で、若者に限らず移住者も積極的に活動できる環境が整っている印象を受けました。また、島民の方々が「より良い佐渡島にするためのアイデア」を互いに相談し合う姿も見られ、地域全体に前向きな空気が漂っていました。

一方で、佐渡島は飛島とは規模こそ大きく異なるものの、離島特有の課題には共通点も多く見られます。地区によっては排他的な傾向があるという声もあり、地域ごとの温度差も感じられました。こうした違いは、「地域をどのようにしていきたいか」という将来像を、住民と行政がどれだけ共有し、方向性をすり合わせているかによって生じる部分が大きいのではないかと感じました。

今回の学びを通じて、地域の外と柔軟につながることで新しい風が生まれるということを実感しました。飛島や酒田でも、外からの視点や人の流れをうまく取り入れながら、島の魅力を発信し続けていきたいと思います。



酒田が欲しいのはどんな人？未来の協力隊ワークショップ

酒田の未来をつくる、協力隊の可能性を探る

10月9日～10日、酒田市役所にて「協力隊に関するワークショップ」が開催されました。市職員に加え、外部の方々にもご参加いただき、「酒田に求める協力隊とは？」を最終目標に据えて議論を進めました。

まずは前段階として「酒田にはどんな人が多いのか？」をテーマに話し合い、酒田らしさを探っていきました。挙がった意見はさまざまでしたが、特に多く共通していたのは「新しいもの好き」「熱しやすく冷めやすい」といった特徴で、街全体に商人気質が今も息づいているように感じました。

議論の末には、酒田が北前船の寄港地だった歴史や、風の強い地域特性から、「船を後押しする風のような人」というイメージが生まれ、酒田らしい協力隊像としてまとめられました。限られた時間ではありましたが、方向性が見えたことに一安心です。

夜には懇親会も開かれ、ワークショップの内容を超えて、酒田のことをさらに深く知る時間となりました。私は今年4月に移住してきたばかりなので、地域の方から直接お話を聞けるのはとても貴重な機会です。初対面でも気さくに声をかけてくださったり、今後の活動に関するご提案をいただいたりと、温かい言葉に励まされました。

今回のワークショップを通して感じたのは、酒田の方々にはサツパリとした気質の中にも人情味があり、誰にでも分け隔てなく接してくださるということ。そんな酒田の魅力を、これからの活動でも大切に伝えていきたいと思います。



酒田市一斉 総合防災訓練 in 飛島

支え合いが、島の防災をつくる

10月18日、『酒田市一斉 総合防災訓練』が行われました。朝8時の警報を合図に訓練が始まり、飛島の緊急避難所である山グラウンドには、車に乗った島民の方々が次々と集まってきました。

市職員であり、消防団の一員でもある私は、まず車両誘導を担当しました。島内には車を持っていない方もいらっしゃいますが、緊急時にはあらかじめ乗せてもらう方を決めている世帯が多く、そのおかげもあってか、ほとんどの島民が警報から15分以内に到着。改めて地域のつながりの強さを感じました。

車両誘導が概ね終わった後は、周囲の様子を見ながらトイレの設営やストーブの点火など、必要な作業を手伝いました。消防団をはじめ、互いに声を掛け合いながら動く島民の姿がとても印象的で、こうした訓練の積み重ねこそが、いざという時の大きな力になるのだと実感しました。

飛島のような離島では、船の欠航などによって外部からの支援がすぐに届かない場合もあります。今回の訓練を通じて、「自分たちの命は自分たちで守る」という自主防災の意識を持ち続けることの大切さを、改めて強く感じました。

